

## 境妙庵目錄小考

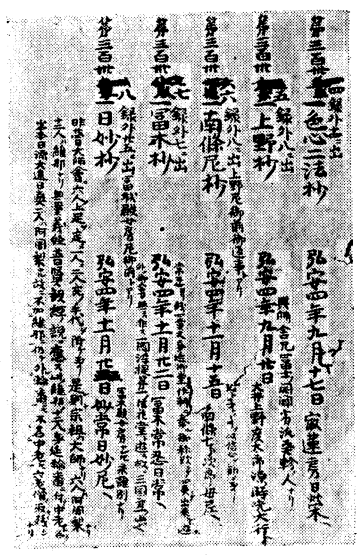
世古政順

御遺文編輯史を案するとき境妙庵目錄の名を度々聞きますが、此の書は先に本學院發行の祖書鑽仰に依れば、寫本で流傳するものの様で同鑽仰には祖書目錄十三目中の一として出し相當重要な地位にあるものと思ひます。

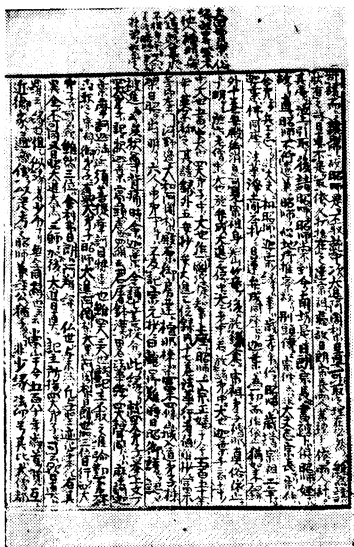
私は今回計らずも玉澤妙法華寺に於て之が寫本（或は稿本か）を拜するの便宜と機會とを得ました故に、聊か烏譚の沙汰とは存じますが之が管見を述べさせて頂きます。尤も既に淺井要麟先生の御意見見であります境妙庵目錄考が、大崎學報に御發表の由と伺ひましたが私は未だそれを拜することが出来ません故、盲人蛇を怖れずの態ですが學子の一小考として述べます。

先づ本目錄は異本もある事でせうがそれ等は後述することにして玉澤秘藏の本を見ますに、本書は美濃大本和装綴で、表紙は橙赤色の用紙を用ひ丁度大本遺文録と同じ大さで、本文は美濃上質の紙で全部三十六紙、序文に二枚、凡例に一枚、残り全部が本文で、本文の行は一頁に六行の割で書かれ字體は楷行二様で對告衆等の註は總て行間或は行の下に極めて細かい字で記されて居ります。

御書の編輯は開宗以後の御書を年代順に配列し、録内、録外、他受用、身延類聚等を集めて、之を四十八卷に分け、全部三百六十四通を収めてあります。編輯の内容は著者の見解で二書又は三書を一にまとめ、或は一書を二書に開すの例を見ますが詳細の説明は之を省きます。本書には所々抹消、書改



本澤玉錄日庵妙境



本寫安日鑑手澤玉

境妙庵日錄小考

め、加入等の個所あり、御書には一通づつ番號を付して示し、殊に第二百廿六通目の御書より下は番號の書改めが甚しく或は一行御書を抹消し後、非レ消の註をなしその實は消すべき所、或は番號の前後して出づる所等あつて、私に考ふるにその前後次第に苦む程であります。又保管宜しからざりし爲か虫喰も相當あり後人の判讀に苦むべき所もあつて今後の保管に相當留意せねばならぬ点もあります。

著作年月はその序に明和七庚寅年十月十三日と記し卷尾奥書も同様であります。著者の名は明記せず、その序に鎌倉境妙庵隱士とあるのみで又奥書には境妙庵主と記されてあります。表題は改装の結果、前の表題が如何な物か知り得ませんが、或は本來は無かつた物らしく、本文に入れて御書年序惣目録とあり、現在は日遙上人筆の祖書日宗目録が表紙に記されて居ります。序文には序と言ふ語が無く、直に漢文體を以て記されて居ります。別人の書き加え等は殆ど無く、唯凡例の一個所に身延本行坊の本に依て之の字を加

ふ云の語があるのみです。

著者に就ては境妙日宗師(玉澤廿五世)説と境持日通師(玉澤卅三世)説の二説あります。前者は聊か年代の誤があります。境妙宗師の入寂は、享保十五年六月日潮師著別頭統記の宗師傳(全三五〇)には元祿十三年正月二十日化、玉澤過去帖及びこれに依つたと思はれる大正六年玉澤發行の日遙上人傳中に輯録した玉澤歴代略傳には、享保十三年正月廿日で、何れが正しいものか不明ですが本目録著作年時、明和七年は前者より七十一年、後者より四十三年の著作で、従て境妙日宗師の著でない事は明瞭です。故に本目録の著者が誰であるかを知るに宗師以後の境妙庵主の事實を探れば良いのです。

此の境妙庵は鎌倉町西御門の谷にその遺蹟があり、鎌倉寶戒寺前より筋違橋を渡つて五丁程で鶴ヶ岡の東傍にあるそうで、西御門は玉澤の舊地濱土と關係ある上杉管領家の職地で、玉澤移轉の直接動機である戦亂發祥の由緒深い處ですが、史蹟探索は未だ遂げてありません。

境妙日宗師は貞享四年に玉澤に晋山。後、洛の妙顯寺に瑞世し、在職七年にして正徳三年に鎌倉高松寺の境内に庵を結んで境妙庵と名けて退隱し、享保十三年に遷化と傳へられます。高松寺は玉澤の末寺で現在は種々の事情の下に仙臺に移轉せられました。私に察するに境妙庵は寺ではなく境妙宗師以後高松寺を稱して庵號を用ひたのではないかと想像されます。即ち高松寺は御庵の住居の意味で、山主等の隱居寺ではなかつたかと思はれます。

舊高松寺に就て一言すれば此の寺は極めて薄祿、近年は維持困難と傳へられたにも關はず寺格は高く、元來は尼寺で寛永十九年紀州徳川家の家老水野淡路守重良が荒廢した太平尼寺の跡に、亡母高松寺妙壽日仙比丘尼菩提のために養珠夫人等の資力を得て女日隆尼を二代として創立したもので、従て山

主等の隱居寺に相應しかつたものと想像します。即ち高松寺と云ふも境妙庵と云ふも一の寺では無からうかと思はれます。玉澤過去帖に宗師高松寺遷化は此事を物語るものではないでせうか。餘談は兎に角、境妙庵の記録は手許になさ故本目録の表紙書によつて調査を進めます。

本目録は明治卅年經王山書庫整理の際、前日蓮宗大學長、玉澤五十一世日遙上人が修補手入の上、經師をして表装を改めたもので即ちその時の表紙書は、

此書ハ何人ノ取調タルモノナルヤ不詳ナルモ鎌倉境妙庵主トアレバ當山廿五世境妙宗師ノ徒ナラシ。明治卅年蟲拂ニ際シ表色ヲ加テ他日ノ參考ニ備モノ矣。

と記され、本書の表題を「祖書日宗目録」とせられ、且宗師の系統の人の著であらうと判ぜられて居ります。

前述の境妙庵の地位等から相當貫祿ある師の住職せられ、而もその資たる人が住せられたと見ることが出來得れば、遙師の説も妥當と信じその資を擧ぐるに日通、日禪、日淳の諸師は宗師の學室に學べる者、又中村檀林に於ても能化職の人士で隨てその内の誰かの著ではなからうかと思はれます。

今通師が本目録の著者であるとの説に従ひますと玉澤過去帖(能師代改更)に、寶曆六年入山在職十四年安永五年七月三日高松寺遷化とあり、日淳師は明和六年入山在職十五年天明三年十二月十九日當山遷化とあり、前後年代を案するに、日通師は明和六年秋の頃、日淳師に玉澤の法燈を譲つて高松寺に引退せられたと推察することが出來、隨て翌年即ち明和七年通師が境妙庵に於て本目録を著作せられたと云ふ事は妥當で通師の著と斷ずることが出來ます。

境持日通師は宗祖及び御直門、檀越等の史傳に精通せられ、その著作は日蓮宗宗學章疏目錄(二一七

頁)に四著を擧ぐるこゝが出来ます。今その全文を示せば、

日通 字、普明、號境持院日蓮宗豆州妙法華寺三十三世、安永五年七月三日化壽七十五

● 祖書證議論 一( ) 寫本 三神良直

● 本化血脈圖解 三 寶曆五年二月十五日 寫本 三保最勝閣

● 祖書目録 一 明和七年十月十三日

〔● 御書略註 二 寫本 日蓮宗大學〕

玉澤手鑑 二 正本 豆州玉澤妙法華寺

右の内御書略註は伊豆、日順師の祖書證議論(身延山史等に云ふ御書問答抄)の刪略書とも見るべきで、同書補訂に訂正するところでありませぬ。宗學全書には史傳舊記部に祖書證議論に代へて御書略註を收めてあります。此の他通師の著は身延山史等に引用する門葉緣記(寫本)があります。章疏目録には祖書目録の寫本存在場所を明記してありませんが、幸ひ山川智應先生の本化聖典解題提要(通論)上卷三〇頁に載する序文の一節は、玉澤藏本のものとは些少の異同があります故に、異本の存在を知るべきで、解題提要凡例に、

境妙庵目録は、師子王文庫藏本の外、通師の第一稿とも認めらるゝ日蓮宗大學藏本、第二稿とも認めらるゝ教友雜誌收載本、最後修治本とも見らるべき文庫本と同種なる稻田海素師藏本の三種に校合して、其の同異を點註せり。云云

と同異校合の上刊行の由、吾等末學には大慶と存じます。

本目録と他の目録との關係は別に論ずる參考文書がありますので、今簡單に云へば、本目録已前の中山

日奥師の御書新目録と同様に編年體であることが主眼点らしく、編年體に輯録しなかつた爲に開宗以前の御書を録内に輯録した誤を生じたとその序文に力説して居ります。御書新目録が本書に直接間接に最何か影響あつたかは疑問で、殊に種々御振舞鈔の編輯には興味ある点が存在します。奥師目録の事は近山川先生の御書新目録の著者に就ての論文が、信人一巻七號、法華十九卷九號に所載、往見願ます。他の目録との關係の詳細は本化聖典解題提要通論、祖書鑽仰、鹽田先生の日蓮上人の生涯、法華十九卷一號、棲神十六、十七號往見願ます。

次に筆蹟に就て一言すれば、玉澤藏本の本目録は或は通師の艸稿本ではないかの疑問から玉澤手鑑正本と筆蹟對照を試みたいと思ひ、山主に對照願ひました所幸に許されその便宜を得ました。玉澤手鑑の私の拜しました所の現在のは二部で、一部は正本とも寫本とも明記してない表紙に玉澤御由緒手鑑と記し、境良桓玉日安の署名花押のある一巻四十三紙の半紙本版對紙を使用した極細の楷書にて記したのも、他の一部は正しく寫本であることを凡例に記した乾坤二卷本で、表題は玉澤手鑑、乾坤と記すもので塔中覺林院の境本日鎮師が伊豆狩野半紙に書寫せるもの、乾七十枚坤四十五枚楷行艸の三様に記されてあります。鎮師本には境持通師の正本に二組あることを記し、一は艸稿本全一卷、二は上梓用の淨寫校訂の定本で全五卷あり、此の本は已に上梓に及ばんとする時に火災(寛政三年十一月の焼亡か)により惜くも焼失し、草稿のみ残つたと言ふ四十一世日桓師の談を記し、自分は稿本で書寫するの意味を凡例に記してあります。以上二部の外に寶庫に通師の正本が存在するか、未調査の故(本年八月は降雨續きなりし爲)に且く知り得ませんが、安師署名本は幾分本目録の極細の字体に似て居り、殊に誤字に於ては柳、結集、博士、法卯等其の他の一致の例は非常に多く、本目録と玉澤手鑑安師本とは何か一脈の關

係ありはしないかと思はれます。

要するに、安師署名本は通師の艸稿正本ではないかと云ふ結論ですが、安師本、手鑑は十四紙左より十八紙右に至るものが草書で書かれた天保年間上表由緒書の寫でありますから、安師筆寫本であることは勿論ですが、第三次的通師の筆蹟が降雨のため得られなかつた事は遺憾です。故に章疏目録の玉澤手鑑二卷は寫本のものであることを附言致します。なほ安師本も鎮師本も内容に於て前後同異もあり丁數も付してありません故、安師は後來一束整理せられたのではないかと思はれますが、これは且く未詳です。因に日鎮日安の年代は、日鎮師は玉澤覺林院廿五世文政四年四月九日入寺。宗學上有名な桓容日智師は全院廿八世天保十四年十月二日入寺。日安師は全院三十世、安政六年十一月五日入寺であります。終に望み通師の思想及びその影響等を述べますが、別の機會に譲つて、小考に對する種々の御便宜を拜謝し玉澤手鑑との再考を願つて擱筆する次第であります、

(身延山負笈西谷學寮の一室にて昭和七年九月四日稿)

## 機械から目的へ

矢 谷 玄 智

私達の遠き祖先が禁斷の果實を食つたことが事實なるにせよ、事實ならざるにせよ、それが私達の原罪であるにせよ、なきにせよ、私達は認識能力をもつ。そしてそれに氣がつくと、つかざるとに拘